

芳野拾遺物語

芳野拾遺物語卷第一

目錄

- 一 後醍醐の天皇吉野の宮にて御歌の事
- 二 天女歌の事
- 三 稻荷大明神臨幸の道を照し給ふ事
- 四 吉水の法印歌の事
- 五 勾當の内侍歌の事
- 六 同じ内侍いもうとの方へ返歌の事
- 七 天皇御歌の徳にて雨はれし事
- 八 宗房卿秀句の事
- 九 高師直辨内侍をうばふ事付タリ楠正行の事
- 十 伊賀の局ばけものにあふ事
- 十一 同じ局芳野にて高名の事
- 十二 源中納言の北の方發心の事

十三 藤原卿鷹巢の山にて讀經の事

十四 同じ入道すて文の事

十五 藏王權現堂炎上付御託宣の事

十六 くまわう發心の事

一 主上よしの、宮にて御歌の事

先帝の御時、世の中移り變りもてきて吉野の假宮に渡らせ給ひ、愛かりし年も事の騒の内に暮れ果て、春立つと云ふばかりなる御節會の様もいと悲し。ささらぎの半過ぎ行く程に、御庭の櫻のやうやう咲き出でたるを御覽じさせ給ひて、勾當の内侍に仰せられける御歌、

「こゝにてもくもぬのさくら咲きにけりたいかりそめのやどと思へど」とながめさせたまふ。

二 天女歌の事

同じみかど、とよのあかりの節會をせさせ給へるに、あまりにかたばかりなる有様をおぼし歎かせ給ひけるに、袖ふる山のまぢかく見え渡りければ、

「袖かへす天つをとめも思ひいでよ吉野の宮の昔がたりを」とうちながめさせ給うて月ふくるまでおぼしましけるに、御夢ともなく袖ふる山の上より白雲のたなびきて南殿の御庭の冬枯れし櫻の梢に止まりけるに、それかとはかりおぼしやらせ給へる。をとめの姿うち姿れたるが、

「かへしなば雨とや降らむあはれ知る天津をとめの袖のけしきを」となくなく詠じて雲がくれけるを、御覽じ送らせ給ひて、御心細げに渡らせ給ひし御有様の忘れがたくこそ。

三 明神臨幸の道を照し給ふ事

同じ帝、花山院をひそかに出御ならせ給ひて大和の方へ赴かせ給ひけるに、いと暗き夜なりければ御供に侍ひける人々もいかにせむとわびあへるを聞かせ給ひて、「こゝはいづくの程にや」と尋ねさせ給ひければ、忠房の侍従「稻荷の御社の前にこそ」と奏し給へば、御歌、

「うば玉のくらき闇路に迷ふなり我にかさなむ三つの燈火」とて伏し拜ませ給ひければ、御社のうへよりいと赤き雲一むら立ちいできて臨幸の道を照らし送りて大和の内山に入らせ給へば、雲はかねの御嶽の上にて消え失せにけり。まさしく御供に侍ひて見し事にこそ。

四 吉水法印歌の事

同じ帝、吉野へ移らせ給ひける又の年の春正月の末つ方吉水の法印に賜はせ給ひける御歌、
「み吉野の山の山守言とはむ今いくかありて花は咲きなむ」と遊ばされし御返しに、
「花咲かむ頃はいつともしら雲のゐるをゑるべにみよしの山」と勅答申されける。

五 勾當内侍のうたの事

同じ御時、山の櫻をながめさせ給ひて、勾當の内侍に「折ふしの移り變るにこそ。昔の歌におしなべて木の芽も春とみえしより花になりゆくみよしの山。とよみつる時は、この山をまだ見ざりし。今はたこゝに住み馴れてその折ふしの戀しく思ひいでるゝはうかに」

とのたまはすれば、共にうち泣き給ひて、

「いにしへを忍ぶ涙はみよしの、吉野の山の花のしら露」とけいし給へば、いといたう哀れがらせ給ひけり。まことに限なき涙のいとまろくこそ覺え侍りけれ。折ふし雁の通りければ、かく心なく雁こそ歸れ」とのたまはせ給ひければ、内侍、

「雁がねにわが身をなさばみ吉野の花も見捨て、歸らざらまし」となむ。主上をかしながらせ給ふところ。

六 内侍いもうとの方へ返歌の事

同じ内侍に故郷の妹の君の方より、「山のうちの御住ひこそ、思ひやられていと悲しうこそ」とありける御文の返事に、

「春は花秋は紅葉をみよしの、山のかひあるすまひとをしれ」。

七 御歌の徳にて雨はれし事

先帝の御時、五月雨のいと久しう降り續き侍りける頃、上達部あまた御前に侍ひ給ひて、御遊のおはしましけるに、實世卿の「川音高き五月雨に、岩本見せぬ瀧の景色こそこよなう」とけいしさせ給ひければ「さもこそあらめ、空さへ晴れなば」とのたまはせて、其のわけの日とりあはずみゆきありけるに、観音堂のはとりまで渡らせ給ひけるに、空のけしきいとおどろおどろしうなりて、又かきくもりて篠をつくが如く降り出でければ、御堂にまばらく立ち休らはせ給ひて、

「こゝは猶丹生の社に程ちかし祈らば晴れよ五月雨の空」と詠じさせ給ひければ、時にとりて晴れけるのみかは、日影うらゝかになりてそれより降らざりけり。帝徳のいみじく渡らせ給へるを、人々も頼もしく思ひあひてけるに、八月の初め頃より秋霧に犯されさせ給ひけるが、豫て時をも知らしめしけるにや、同じき十五日の夜、親王を左大臣經忠公の亭に移し奉らせ給ひ、三種の御寶を譲りおはしまし、御行く末の事いと細やかに仰せおかれて、御劔と法華經とを左右の御手にもし給ふ。いざよひの月と共に雲隠れさせ給ひけるに、附き従ひ奉りし人々は唯關路に迷ふ心ちなむし給ひける。御姿を改め奉りて、如意輪寺の御堂のうしろの方にをさめ奉り、御おくりして人々は歸り給ひけれども更に人心ちもなかりければ、御廟の前に泣きあかして、まのゝめ過ぐる程を待ちてかしらおろし、畏き御影のあたり近く草の庵を結びて、無き御跡まで仕うまつりけるに、その長月の十日あまりの月いとさやかに見ゆるに、昔の御事など思ひ出して、

「今ははや忘れはつべきいにしへを思ひいでよとすめる月かな」といひて、すこしまどろみけるに、御廟の前に百官袖を列ねてなみ居給へるを、資朝卿の萬はからはせ給ひておはします御袖を控へて、問ひ奉るに、「こゝにては舊都に程遠うして、御ほいを遂げさせ給はむ御謀も成り難ければ、龜山の仙洞に行幸ならせ給へるにこそあなれ」とのたまひもあへぬに、御扉の開き給へるに見奉れば、其のきはの御姿にて玉のみ輿にめさせければ、伶人樂を奏して百官供奉し奉りけると見てうち驚きけるに、松吹く風に音樂の猶聞ゆるものから、五つの

色の雲御廟より出で、北の方へ長うたなびきて見ゆるに更に涙もとくまらで御影も今はこゝにおはしまさぬにやといと悲しくて過ごし侍る程に、同じき夜に、舊都にいます夢窓和尚の夢に、君龜山の舊跡に行幸ならせ給ひて、群臣と共に宴せさせ給へると見給うて、武家に心を合せて御寺を營み給へると後に傳へ聞さけるに、今更のやうに思ひ出でられて、袖をしぼり侍りし。

八 宗房卿の秀句の事

先帝の御時、辨の内侍といひけるは、右少辨俊基朝臣の御女なりけり。御父におくれさせ給ふものから、母君さへ世を厭はせ給ひければ、三位行氏卿の許におはしましけるを、先帝御位をそへさせ給ひしより御宮仕え給ひける。又世の中亂れて皇居も處定まらざりけれども、離れ給はで吉野まで参り給ひけり。ある夜御まへに中納言隆資卿、洞院の實世卿、宗房卿、其の外あまた侍ひ給ひけるに、みき賜はせむと、此の内侍の御かはらけもて出で給ひけるに、いかゞし給ひけむ、取り落し二つばかりに割れければ、御氣色のいとあしくみえさせ給ひければ、とりあへず、

「さかづきのわれてぞいづる雲のうへ」とのたまひければ、御心よげに「誰かつぎ給へかし」と秀句にとりなさせ給ひければ、宗房卿、

「星の位のひかりそへばや」といひ給へるに、興せさせ給ひて夜も明けなむとするまでみき参りけるに、山鳥の聲の聞えければ、隆資卿、

「還幸と啼くや吉野の山がらすかしらも白しおもしろの夜や」とのたまひければ、いとい
たう御心よげに渡らせ給ひけり。

九 高の師直内侍を奪ひとる事

辨の内侍御形のいとめでたくさふらひしを、武藏守師直がいかなりけむ折にか見そめけむ、
心に懸けて思ひけるに、みかと隠れさせ給ひて後、ひそかに御文を奉りて、「忍び出でさせ給
へ。御迎を參らせてむ」とたびたび言ひこしけれど御返しもえ給はざりければ、ねたく思ひ
て、行氏卿へ通ひける女のありけるを求めいで、北の方へ「かゝる事なむ侍る。共に計らば
せ給ひてはいとげなむには、知らさせ給はむ所をも數多つけ侍りなむ。三位殿の官位をも進
めて」などいひおこすれば、さらぬだに世の中の人の恐れぬはなきにいと頼もしく聞えけれ
ば、御文を整へ給ひて内侍の君にもと仕うまつりし梅が枝といひし女を添へて「共に計らば
せ給へかし」と聞えけるに、いと喜びて命をかけて契りける侍廿人が程擇びて梅がえに添へ
て吉野へ遣しける。内侍の君に、「梅が枝が、北の方のふみを持ちてこそ」と言ひ入れけるに、
「御戀しう思ひて過ぐしつるに、こなたへ」と召されて、御文奉るに、「はるかにこそ渡らせ給
へ。山里の御住ひさこそと思ひやらるゝことに、袖をこそまぼりあへ給はね。御戀しさのい
とせめて住吉へ詣で侍りし程に、道の便りも知るべければ、逢ひ奉らむ事を思ひて河内の國
とかや、高安の邊に知りたる人の侍ふに參りてこそ待ち奉れ。はかなき世のましてみだれが
はしければ、此の度ならでは、いかで逢ひみむ」など書き給うて、

「あひみひと思ふ心をさき立て、袖にまられぬ道芝の露」と御使も御文の心にかきくどきければ、「誠の御母君に捨てられ参られぬしよりは、それにもまさりて思ひ給ひし御情の忘られで、朝夕戀しう懸思ひ奉りつれ」とて、君に御暇を申し給ひて取り敢へず出でさせ給へり。女房二人青侍三人御供にはつかうまつりけるに、道に人出であひて「高安に待たせ給ひけれども、人多くてむつかしければ住吉まで罷るにこそ。もし御出も候はら、あれまでぐし奉れと仰せおかれて候へば」とて人あまた出で、取りこめ奉る。「いと心得ぬ事にこそ。住吉まではるばるといかで行きなむ。御輿をかへせ」とのたまはすれば、青侍ども御輿をかへしなむとしければ、「唯住吉まで急ぎ給へ」と引き立つるに、いかにも叶ふまじけれど引き止むるを「さな言はせそ」とて三人共に打ち殺してけり。君はいと恐ろしく鬼に取られ給へる心ちし給ひて唯泣きに泣かせ給へり。物の哀れをもわきまへぬものゝふども、なさけなう「今宵住吉までいそぎなむ。殿もそれまで出で迎ひおはさむ」など言ひのゝしりて石川といふところまでゐてゆきけり。帶刀正行が吉野殿へ召されて参るに行き逢うて其の程過ぐしなむと傍なる木蔭に立ちまのぶを心もとなく思ひて立ち止りて、事のさまを問ひけるに、「局方の住吉に詣でさせ給ひける」といふに「さては」とて過ぎなむとするに、内侍の泣き給へる聲を聞きて、おして御輿のはとりへ立ち寄りて問へば、「かうかうの事になむ」とのたまはするに、いかさま怪しければ「奏しなむ程は皆召し捕れ」とて残らず搦めにけり。恥を思へる者三人四人ありて抜き合せ戦ひけれども遂に打ち殺しぬ。吉野へ参りて事の由を奏し奉れば、梅が

枝をすかして問はせ給へば、謀りつる事を申しけるに、侍共は皆斬られて梅が枝は尼になし給うて、「かゝる有様を北の方へよくよくけいせよ」とて歸されにけり。「この正行がなかりせばいと口惜しからましに、よくこそ計らひつれ」とて内侍を正行に賜はせむと勅ありければ、正行かしこまりて、

「とても世にながらふべくもあらぬ身のかりの契をいかでむすばむ」と奏して辭しにけり。其の時は心得難く覺えしが、後に思ひ合はされていとい惜しみあひにけり。

十 伊賀局化物に遇ふ事

新待賢門院に伊賀局といふありけり。これは左中將義貞朝臣の侍に、篠塚伊賀守といへるが女になむありける。女院の御所は皇居の西の方にて山につゞける所なりけり。去ぬる正平ひのとのゐの歳の春の頃「ばけ物あなり」とて人々騒ぎ懼れ給へる。形をまかと見定めたる者もあらず、行き逢ひける者は心ちあしくなりにけり。内裏より御殿居人あまた參らせ給うて墓目など射させ給ふ其のほどはしづまりにけり。水無月十日あまりの程に、いとあつき頃なりければ此の局、庭にいで、立ち給へるに、月のさしいで、いとあかりければ、

「涼しさをまつよく風に忘られて袂にやどすよはの月かげ」と誰聞く人もあらずとひとりごち給へるに、松の梢の方よりからびたる聲して、「唯よく心静かなれば即ち身も涼し」といふ古き詩の下句を言ふに、見上げ給へばさながら鬼の形にて翼の生ひいでけるが眼は月よりも光り渡るに、猛き武士の心も消え失せぬべきにうち笑ひ給うて「誠にさにこそあり

けれ。さもわらはあれ、いかなる者にかあるらむ。あやしく覺ゆるにこそ、名のりし候へ」と問はれて、「我は藤原の基遠にこそ侍れ。女院の御爲に命を奉りさふらひしに、せめてはなき跡を問はせ給はむ事にこそあれ。それさへなく候へば、いと罪深くかゝる形になりて苦しき事のいやまされば恨み奉らむと思ひて此の春の頃よりうしろの山に候へども御前には恐れて參らぬにこそあれ。此のよし啓して給ひなむ」と答へければ「げにさは聞き及びし。されど恨み奉るべき事かは。世の亂れに思ひ過ぐし給へるぞかし。其のことわりならばけいして吊ひてむ。さるにても御經にはいかなる事かよかるべき。心に任せ侍らむ」との給へば「唯其の事ばかりに候へ。御弔には法華經にまゝはあらじ。さらば歸りなむ」といふに、「歸らむ處はいづくにか」とのたまへば「露と消えにし野の原にこそなき魂はうかれ候へ」とて北をさして光りもてゆくを見送りて後、女院の御前に參りて啓し給ひければ「まことに思ひ忘れてこそ過ぐしつれ」とて、明の日吉水法印にみことのりありて、御堂にて三七日法華經を供養し給ひけるに、其の後はあへて異なるわざもなかりき。うかびてやあるらむ。いと頼もし。

十一 同じつばねよしの川にて高名の事

此の局一とせ武藏守師直が皇居を襲ひ奉る時に、防ぐべき使りのなかりければ人々猶山深く入らせ給ひけるに、女院の御供にはかばかしき侍もつき奉らで、女房達ばかりなりけり。吉野川の橋一間が程流れ落してありけるに、せむかたなくて皆あきれてたゞせ給へるに、此の局其のはとりの松櫻の大きな枝どもを引き折り引き折りうち渡して女院を負ひ奉りて

人々をも渡しはて給ひける。後に其の時の大枝を園部の六郎に折らせて御覽ありけれども、叶はで止みにけり。いと厳めしき事にぞありける。今は左馬頭正儀の妻になむなり給ひし。

十二 源中納言の北のかた發心の事

先帝の御時、源中納言みちのくの軍をわまた從へ給ひ、道々をも平げて美濃國までおはしけるよしさきだちて聞えければ、うへよりはじめて頼もしき事におぼし給ひけるに、阿部野の露と消えさせ給ひけると、刑部の丞友成が其のきはの有様を参りて泣くなく語るに、燈火の消えぬるやうになむ人々の心はなりにけり。御父の卿はいかばかりおぼすにかとて、

「さき立てし心もよしや中々にうき世の事をおもひ忘れて」。北の方は唯伏し沈ませ給うて更に御心ちもなかりけるを、騒ぎておもてに水などそゝぎしける程に、又の日の夕暮の程にすこし御心ちの出でさせ給ひて、

「玉の緒の絶えもはてなで繰り返し同じうき世に結ばゝるらむ」。猶同じ道にとおぼしめし立ち給へる御氣色のいちじるく侍りければ、立ち去り給はで人々の護りければ、御心にも任せ給はで觀心寺といへる山寺のふもとにて御ぐしおろして住ませ給へるに、すぎにしこといをも思ひ給ふにぞ、

「そむきても猶忘られぬ面影はうき世の外のものにやあるらむ」。こゝに三年が程過ぐし給うて、世の騒ぎもしばしはあづまりければ、さすが故郷の方や思ひいだされ給ひけむ、吉野山をたどり出でさせ給ふとて、

「うづくにか心をとめむ吉野のよしの、山をいで、行く身は」。親房卿の御許に暫しはおはして、曉がたに立ち出でさせ給ひけるに、御名残のつきさせ給ふまじき御事にてありければ、かへりみさせ給へるに、有明の月のいとさやかに山の端近く見え給へば、

「別るれどあひも思はぬみよしの、峯にさやけき有明の月」。阿部野を過ぎさせ給ひけるに、「こゝなむ其の人の消えさせ給へる所」と告げれば、草の上に倒れふさせ給うて、

「なき人の形見の野べの草枕夢も昔のそでのしら露」。このはとりに刑部の丞友成が世をそむきてありけるを尋ねさせ給ひけるに、急ぎ参りて御有様を見奉り、さしもゆかしく渡らせ給ひける御よそはひの、いつしか變り衰へさせ給ひけるにやと涙とためあへず。住吉天王寺のはとりまで御送りに参りて所々のあないしけるに、天王寺の龜井の水のはとりの松の木を削らして、

「後の世の契のために残しけり結ぶ龜井の水ぐきのあと」と書きつけ給へり。それより友成入道は歸りにけると一とせ尋ね來りて語りけるに、いと哀に思ひ奉りて其の後天王寺へ参りけるに、御筆の跡消えもはてすして残りけるを見参らせて、そゝろに袖をまばりにけるにこそ。其の後舊都にのぼらせ給ひて母君も共に世をそむきおはしけるが、先だち給ひて又の年の春うせさせ給ひけると聞えし。中納言資相卿の御女なりし。

十三 藤房入道鷹巢山にて讀經の事

刑部卿義助朝臣の越前國よりいまして物語に、「越前の國鷹の巢の山は高くそばだちて城郭

に然るべき處ありければ、六郎左衛門時義といふ者に守らせけるに、あないを知らむがため
に猶奥深く分け入りにけるに、谷川のいと清く流れけるを其の水上市を尋ねに登りけるに、さ
し出でたる岩をかたどりて、松の葉にて葺きたる庵の見えけるを、がゝる處にも住む人のあ
りけるにやと立ち寄りて見侍れば、木の葉を集めてむしろとし、平らなる石の上に法華經を
置きける外には何も見えず。まばしありけるに山路をたどり來る人を見れば、瘦せ衰へたる
僧の櫛を手にて持てり。いかにし給ふにや^如と物のかくれより見けるに谷川の水を結びて庵の
内に入りて經の紐を解きたるほどに、讀みはじめ給はぬさきにと急ぎ行きて、かゝる御住ひ
こそいと貴く覺え候へ、いかなる人の世をそむかせ給ひけるにや^如と問ひ奉るに、そこには
いかにとたづねさせけるほどに名のりをしつれば、いとはいなささまして、吾妻の者にこそ
とばかりのたまひて經を讀み給ひしほどに歸りて候へ、藤房卿の御面影して侍るといひし
まゝに、いとゆかしくて一條少將を伴ひて參りけるに、庵は其の儘ありて僧はみえ給はず。
經のありつる石と聞えしに、

こゝもまたうき世の人の問ひくれば空行く雲に宿もとめてむと書きつけ給へる筆の
あとを、少將のよく見知り給ひて其のはとりの山々を尋ねさせ給ひけれども更にみえ給は
ねば、いとはいなくてとのたまひしを、人々きゝもあへ給はで皆涙落してけり。さしもいみ
じかりける人の聞きしがごとの御住ひはまことにありがたき御心にこそ。年月を合せて見
侍るに君が住む宿と言ひこされしは後の事なり。越の方より筑紫へ通り給ふらむ折にや。其

の後は絶えて御音信も聞かざりし。此の藤房は大納言宣房の子なりしを、才智世にすぐれさせ給ひて君にも御覺えの浅からで中納言までなり給ひしが、建武さのえ戌の年の春俄に世をすて給ひし。

十四 中納言藤房卿すて文の事

同じ頃大納言實世卿の御許へ童のふみもてきたりけるを、見給はせければ、

「君が住む宿のあたりを來てみれば昔にぬらす墨染の袖」とさながら手跡も昔に變らぬを、あはれと驚かせ給ひて御使の童を召し寄せて問はせ給へれば「今朝西なる野に出で、草を刈り侍るに、瘦せ衰へたる修行者の、此のふみとゞけてよと仰せ候ひし」と言ふに急ぎ皇居へ參り給うて大和紀の國河内關々にみことのりして修行者をとゞめけれども、それとも覺しきはあらざりけらし。中納言藤房入道の御手にてぞありける。

十五 藏王堂炎上付タリ御託宣の事

藏王權現は役の優婆塞の行ひいでさせ給へるよりこのかた、靈驗あらたにわたらせけるにより、大塔金堂玉をみがき南の方には金剛力士の立たせ給へる二階の門、東に救世觀音の御堂、阿彌陀如來の御堂は西の方に立たせ給へり。中にも大威徳天神の御社は日藏上人の冥土にて延喜の御門の勅をうけ給ひて、此處に營ませ給へるとかや。さしもゆゑしき軒を並べておはしましけるを、正平つちのとうしの歳睦月のころにや、帶刀正行が世を短かう思ひとりて、力の衰へぬうちに君の御ため父がために討死してひと先帝の御廟に詣で、心を一つに

定めける輩の名を書き付けて敵の陣に向ひけるが、多くの軍を追ひ靡けて後終に討死せし勢に乗りて、武藏守師直が四萬餘の軍を従へ皇居を襲ひ奉りしに、禦ぐべき便りなかりしかば、君をはじめ奉りて猶山深く入らせ給ひけるに、皇居を始め參らせて多くの伽藍を燒きはるばしけるが、誠にあさましきわざなりけり。神といひ佛といひ二世の苦みをいかで遁れさふらはひや。かくて軍ども歸りしかばかたばかりなる假屋を造りて本尊を移し奉るに、衆徒の中に何がしの法眼とかやいひしが夜もすがら御前にさぶらひて、「今は佛の御力も失せさせ給ひけるにや、かくあさましき御有様にこそ、柔和の御姿を引替へさせ給へる御驗もなかりつれ」とてさめざめと泣きわてうち眠りけるに、夢ともなく現ともなく柔和の御尊體の顯れさせ給ひて、「よしや唯恨みずともあらなむ。佛は迷へる衆生を導かむが爲にこそ此の土には濟度方便の事にこそあれ。佛ももとは衆生なり。衆生は終の佛なり。罪を作りし上にこそ又罪をもあたへめ。さし向ひては本意にあらず。それと知らるゝ事のかならず」とて、「恨むなよさてやはやまむ梓弓眞弓槻弓年はふるとも」といひ捨てさせ給うて曉の月の山のはに隠れさせ給へるが如くなりけるにうち驚きて其の有りつる事を委しく記して奏聞し奉らるゝに人々も覺束なく思し給うて深く納めおき給ひけるが、果して明の年より尊氏と直義との中らひあしくなりて、直義は御み方に降りて又の年の二月の程に武藏守が一族、皆亡びにける。其の折に様々不思議のありけるよし傳へ聞きしかど、見ぬ事なりければこゝには洩し侍る。直義も君の御力を借り奉りて私のはいを遂げぬれど、又心變して都に歸りけ

れども、誠の道ならねば天に背きて其の秋の比にや東にて尊氏のに亡されけるとぞ聞えし。

十六 くまわう發心の事

大夫の判官光のりが津の國のかためありける時、左馬頭正儀にたびたび計られけるを口惜しく思ひこめて過ぐし侍りけるに、去ぬる住吉の戰に討たれて失せし宇野の六郎といひしが子に熊王といひけるがまだ幼き時、光のりにいひけるは「正儀は我がためにも親の敵にて候へば、いかにもして討ち侍らむ。河内へうち越えて正儀に仕へ侍らむに、幼くて候へばなとか心をゆるし申さむ事のなかるべき。たとへ心をゆるす事の侍らずとも七とせ八とせの程も仕へ候はゞ其の内には討ちぬべき便りのいかでなからむ。御暇をこそ給はらめ」と涙を流せば、光教（あきのり）もいと哀と思ひながら「幼ければ敵の國へやらむも心もとなし。又は命に代りて討たれし者の子なれば形見とも思ふべければ」と、強ひてとめ給ひけれども「すこしおとなしくなりなばよも近付け給はじ。幼くありなむ時参りてこそ」と頻りに望みければ力及び給はで常に身を放ち給はざりし刀を賜ひて「是にてはい遂げよ」とて、阿部野まで人あまた添へてやらせけるに、そこよりはわれにひとしき童一人を具して赤坂の城に行さて、其のほとりに佇みてありけるを、兵庫の介忠元が見つけて「いかなる人にや神おはすらむ」と尋ねられて「我は大夫尉光教（あきのり）の侍に、宇野の六郎といひけるものゝ子に、熊王といへる者にて候へ。父にて侍る六郎はいにしへ住吉の戰に討たれて候ふを、一門にて侍る備後守がわれを追ひ撃ちて領地を奪ひ候へども、光のりと心を合せ候へばせむ方なくていかなる寺へも入り

侍りて僧法師にもなり、父が跡を弔ひ候はむが爲にさすらへ侍る」といひけるを哀と聞きて
まづ我が方に伴ひて様々いたはりて後に、正儀に有りつる事を語りて「幼くは候へど心のさ
かさがしくて」など申すに哀がり給ひて召し寄せ給へり。もとより情ありける人なりければ
熊王も思ひ付きて親の仇をも忘れにけるにや、よく宮仕へにけり。十五六程になりければ河
内の國にてすこしき所をゑらさむと言ひけれども、「恥ある一矢をも射候ひてこそ」とて辭
しにけり。明くる年の春父が七めぐりに當りけるに思ひつけ、今宵は正儀を討ちて父の
手向にもし光のりの心をも安め奉らむと思ひ立ちてありけるに、其の日正儀のいひしは「今
日こそ吉日にてあるなれば元服せよかし」とて、和田和泉守に髻とりあげさせて和田小次郎
正寛と名のらせ、吉野殿より賜はせける鎧を賜ひければ熊王涙を袖にかけて喜ぶ。夜に入る
まで正儀の前に在りけるが、又ふと思ひいで、討ち奉らむなれば今宵こそと思ひて、膝を直
して正儀に目をかくれば、年頃情深かりし事今日の元服の事など思ひ續けて、いかで情な
く討ち奉らむと思ひ返して心を鎮むれば、父の敵又は譜代の主君の仇といひ一かたならね
ばと思ひ定めけれども何心もなく渡らせ給ふ有様を見ければ、御いたはしくて堪へかねけ
るにや、廣縁に出で、大聲を揚げて泣き叫ぶを、人々も正儀も覺束なく思ひ給うて障子を開
き見給へるに、伏し沈めるさまのたゞにはみえずありければ、「いかにや」と問はせ給ひけれ
ば、有りつる心のうちを申して、「とにかくに君の爲先君の爲父が爲にみづから死なむより
外は候はず」とて刀をとり直せば、在りつる人ども皆涙にくれてありながら、「いかでさは

あらむ」と取りつきて勳かさねば力及ばで後にはその刀にて髻おし切り往生院にて形をかへ、君より賜はせたる名なればとて正寛法師とぞいひける。寺の傍に草の庵を結びてもしも心の變る事のありもやせむとて往生院の門の外へは出でずして行ひてありけり。光教より賜はりける刀はありし有様を委しくかさそへて故郷へ返しけるとかや。いと哀にこそ侍る。

吉野拾遺物語卷第二

目録

- 一 鷹怪鳥をとる事
- 二 やすかた水練の事
- 三 やす藤が下女の事
- 四 わやしき菓をくひて死する事
- 五 兼好法印來談の事
- 六 公連朝臣閑居の事
- 七 犬王丸山だちにあふ事
- 八 さねかつ朝臣北のかたの事
- 九 ゆきすけ卿の妾歌の事

十 はなの高き狂歌の事

十一 松たけの歌の事

十二 正つらが暮らくしゆの事

十三 やすむらながしげ狂歌の事

十四 ゆきつぐとんせの事

十五 中納言のつばね歌の事

十六 つくり山ぶしの事

十七 あらし山の事

十八 ひろなりのみこ鷹がりの事

十九 大神宮御たくせんの事

一 鷹怪鳥をとる事

今上御位に居させ給ひし始つ方伊豫の國左馬介氏明のもとより「世にためしなき程の逸物なり」とてはい鷹一もと奉られしを大納言隆資卿にあづけさせ給ひて折々御らんじさせ給ひけるに誠にすぐれたりけり。そのころ皇居のうへなる山の茂みより夜な夜な出で、鳥の聲に似て内裏にひいき渡りて鳴くを「怪しき物にてあらむ」と武士に仰せて射させ給ひけれども所定めざりければかれもこれも叶はでやみにけり。或る時かの鷹を麓の野邊にて雉子に合せ給ひけるに、雉子には目もかけで山の方へそれ行くを「さしもかしこおぼしめす御

鷹を」とて行く方に群がり行くに、茂みの内に入りけるを「いかにせむ」とて守り居ける程に、鵜の大きな黒き鳥を追ひ出して空にて組み合ひ共に落ちけるを、人々寄りて怪鳥殺してけり。形はからすの如くにて右左の翼を引きのばして見ければ七尺餘り有りけり。鷹胸の程をくはれてしばしの程ありて死にけり。よなよな鳴きつるは此の鳥にてこそありけむ。其の後は音せざりけり。何れに唯事にてはあらじ」とて、二つの鳥を塚にこめて其の上にはひさき社を建て、鳥塚といひてまさにありける。怪しき事にこそ。

二 やすかた水練の事

將軍の宮若き殿上人あまた伴はせ給ひ、吉野川にて鵜をつかはせて御覽ありけるに、左衛門尉康方が若かりけるときに、鵜の鮎をくらふを見て、「あたらくことにこそ。鳥のくふ魚をとりて、まसान事にせさせ給へかし。網こそよかるべけれ」と言ひけるに、皆人をかしがらせ給ひて、「汝あみさばさなむや」とのたまはす。「いとよくさばさなむ」と言ひて、網もちて出づるに、さぬ皆脱ぎすて、鳥帽子はありしまゝにありけるを、緒をつよくしめ舟に乘らむとするに、「たいおき給へ。いと怪しう」と制せさせ給へども「何かは」とて網を打ち入れけれども魚一つもなかりければ、人々笑ふに、又網を入れむとせしが踏みはずすが如くにしてつぶつと水の底に沈みけるを、「さればこそ」とて人々騒ぎて水に馴れたる者どもを川の下に入れて、求めさすれどもあへて見えず。暮れなば篝火にて鵜をつかはしてひ、螢の面白からしなと思ひ給へる興も盡きて、せめてはなきがらをだにと岩根岩根を隈なく見せさせ給へども

かひなし。親しきが許へ人を走らせなど玄給ひ一時が程も過ぎにければ、人々は歸り給はむと言ひあへ給へるに、すこし川上の方の烏帽子ばかり水の上に見えけるを、「あれあれ」といふがうちに顔ばかりさし出してうち笑ふを、「いかに」と言はれて、「まさな事にせさせ給はむ程のものは、網にてはとめ得じと思ひ候ひて、水底を求め侍りしにこゝもとには候はで宮の瀧のあたりまで行きてこそ。思ふ程に候ひ給はねど」と言ひて浮きあがるを見れば三尺ばかりなる鱸といふ魚と二尺餘の鯉とを左右の脇にはさみて、蛭子のさまして岩の上についゐけるに、人々驚き、宮にも、無きものとおぼしめしてあわて騒ぎつるさまなど語り給ひて興に入り給ひぬ。其の夜鵜を使はせ螢を取りなどせさせ給ひてつとめて上の御前にありつる鱸を奉りて、康方が事をけいし給はせければ「興ある事にこそ。近き程にみゆきありて御覽じさせ給はむ」と仰せありけるとかや。

三 康藤が下女が事

此の康方の親大夫尉康藤が許に下仕しける女ありけり。同じく侍ひける藤六といひける雑仕と心を通はし侍りけり。彼の女いたくいたはりける事の侍りしかば、藤六が居ける山陰の屋にこさせてありけるに京に在りける女の母の、夕暮の程に「かゝる事のありと聞きていと心もとなく思ひてとりあへず來にける」といふに女もいと嬉しげに昔の物語などしけり。此の母いとかひがひしく扱ふを男は嬉しき事に思ひて此の程の疲に心怠りしてねぶるに此の女の聲して叫ぶにうち驚かれて「何故にや」と言へど又女はいらへもせず臥し居け

るに、夢にやありつらむと思ひて灯の影よりに見るに、母は枕がみに居て泣き居けるを、心得ず思ひながら又しばしねぶりける程に、此の度は痛く叫びて屋の上の方に聞えけるに、其のまゝおき出でけれども燈火も消え失せにければ、走り出で、聞くに、屋の上より山の方に叫び行く。あわて、呼ばる程に康藤も「何事にか」とておはす。外の人も聞きつけて數多入り來て松どもともして尋ぬるに、うしろの山に聲につきて行けば下なる谷に聲すなり。谷に行けばかしてに聞え、かしてに行けばこゝに聞え、手を分けて叫ぶ聲をえるべに追ひ行けば夜の明け行くに隨ひて聲もかすかになりてはのぼのと明けにければ、追ひとまりにけり。分ち追ひける人々の青根が峯の方へ行きしもあり。宮の瀧、六田の淀、あしたが原などまで聲につきて行きしぞ。心得られね。ありつる間に歸りて見れば女は其のまゝ臥してあり。母は見えずなりにけり。其の後便りにつけて母の事を聞き侍るに、其の日の夕暮の程に京にて身まかりけるとかや。なほ心得られぬ事にこそ。

四 あやしき菓をくひて死する事

同じ頃先帝の御廟のうしろの方に異木の生ひ出でけるを、誰も知らず過ぎにし。其の年三尺餘りにのびけるまゝに人見つけにけるに、いかなる木とも知らず、木の皮は櫻木にひとしく、葉はかつらのやうにてそれよりはいと大きなり。又の年の春ささらぎの比に花の咲けるをみれば、椿のなりして開けたるが五寸ばかりもあるらむ、色はちしほの紅も及びがたき程になむありける。まばみ散りて秋の半に實のなりけるがいと大きな柿のなりして、初め

より花の色の如くに赤かりけり。ふるき山人あまた召し出されて尋ねさせ給ひけれども知れるものもなし。典藥の頭も「古き書にも見侍らず」と奏し奉れば「かく怪しきものはさてありなむ」とて、まはりを厳しく圍はせて、人をつけて守らせ給ひけるに、源の康村が下づかへの童が夜ひそかに此の實を盗み取りてくらひけるに「味はひのかうばしきことはものになぞらふべくもあらず」といひけるが、頭より足の先までたい赤くなりぬることたとふべくもあらず。こゝちそこなひ二三日して死にけり。その木もまはすばかりの雪にあひて枯れにけり。いと怪しき事にこそありけれ。

五 兼好法師來談の事

同じ頃兼好法師が玉津島に詣でしけるとて尋ね來て尋ねいにしへ深く契りける中なりければ、いと嬉しくて昔今の物語しけるに、「故法皇の和歌の道に深くおぼし入らせ御なさけの淺からせ給はで、かしこき御影とならせ給ひし悲しさのまゝに世にながらふべき心ちもあらざりけらし。せめてのやる方なさに御後の世をもと思ひ給ふるまゝに、かゝる姿となり侍れども露の命の消え難くてかゝらむ世を目のあたりに見侍ることよ」と袖をまばられけるに、「我も先帝の御情の忘れ難くて、御跡をも慕はまほしくおもひはべれども、さすがに思ひ返し侍りて柴の戸ぼそには侍れども、心は浮雲の風にたゞよふらむさまして、はかなき夢路には故郷の空にも通ひ、思ひとづむれば西の御空にもあこがれ、春の朝には吉野の花の梢にやどり、秋の夕べの哀を思ひつゝけては、さやけき月の影をも曇らせ、もろくも落つる木の

葉を見ては、はかなき世を思ひめぐらす袖の時雨となりて、染めにし墨の色も空しく旅行く人を思ひ送りては、まだ見ぬ峰をも越ゆるにこそ。いかなる縁にもふれ侍りて人目絶えなむ山深きいははの洞にもをさまらでとこそあけき過し侍りぬ」といへば、「誠にさには候へども、我一とせ木曾の御坂のあたりになさそらひ侍りし時、山のたゝすまひ、河の清き流に心とまり侍りしかば、こゝにぞ思ひといまりぬべき所にこそ侍れとて、

思ひたつ木曾の麻ぎぬ浅くのみ染めてやむべき袖の色かはと詠じて庵を引きむすびてまばし候ひしに、國のかみの鷹狩に人あまた具し給うて、山深き庵のはとりまでいまして、かりし給ふさまのあさましく堪へがたかりければ、

こゝも又浮世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがなと詠め捨て、出で侍りし。それよりいづ方へ心をとむべくもあらずと思ひとりて、故郷に立ち歸りて侍れば、世の中の亂れける程に唯和歌を伴ひとして心を澄し侍らむより外はあらじと思ひ侍るにこそ」と啓して涙を流されしは、誠に世を背く心はひとしくこそありけれ。そゝろに袖を絞り侍りし。

六 公連朝臣閑居の事

長月の頃、吉野を出で、奈良の都のゆかしく侍りて、こゝかして見ありき侍るに、大安寺といへる所に、公行朝臣の世を厭ひいますなるを思ひいで、尋ね侍りしに、ひまあらはなる柴の戸のまばしが程も住むべくもあらぬ、板井の水は木の葉にうつもれて、わざとならぬ庭の叢の色はさながら霜にけたれぬるにや、風もたまりぬべくもあらぬ障子をひきたて、いま

すにや、其の方に御經の聲を聞ゆなる。讀みみてさせ給へる程を待ちてみ候へ懸待ば、さしも華やかにおはせ三時し御有様はいづちいけむ、瘦せ衰へさせて香のけぶりにふすばり給へる御かたち涙をうかべさせ給ひて、「世の中のつゝましさにふと思ひ立ちてかゝる姿にこそ侍れ。其のきはには人々の俤のみ立ちそひ侍りて、世を通れしかひもなくこそと悔しきのみに過ぐし候ひしが、程ふるまゝに浮雲の消えゆく心になむものし侍りて、心の月も澄みわたりて後世のいとなみより外は候はねども、父の卿のさぞたよりなくおぼし歎かせ給ふらむと思ひ出づるたびごとにまたかき曇るにこそ。されど讀み奉る御經は其の御爲にるかうすなれば、二世ともに御心安くるさせ給はむかしと立ち歸り給はゞ傳へなむ」など仰せられて、一夜が程昔今の物語してはのぼのと明くる程に泣く泣くかへりにけり。此の公つら朝臣は洞院右大臣殿の御子にて御覺えもいかめしく渡らせ給ひ頭の中將までならせけるが、今上のささいの宮をいかなる玉垂のひま求めさせ給ひけるにや、はのかに見させ給ひけるが、堪へぬ御思ひに世の中の事もおぼし忘れてうちふさせ給ひけるを、まばしはいかなる御惱にや和と人知らざりけるに、思ひよわらせ給ひけるにや、まのびて御ふみ奉らせ給ふ、

「吉野川岩うつ浪のいはでのみ玉ちる袖を君にみせばや」。宮の御返し、

「なき名さへ早く流るゝ吉野川岩うつ浪のいはでやみなむ」とありけるを、うちもおかせ給はでながめあかしけるに、御父の卿ふと入らせ給ひければ、驚き給ひておきわすれたる文を見給うて「ためしなき事にはあらねども、かく亂れたる世にしあれば君さへ鄙の御住ひに

わたらせおはしまして、安き御心もおはすべきかは。まして下としては御敵をほろぼしなむはかりごとを心にこめてこそ誠の道ならめ。それさへあるに御うしろめたなき事にこそ。たい思ひとまりてよ。公泰公の三の君をこそむかへてむ」といさめ給へば、いといたうはづかしげにわびられしけしきなりしが、其の夜吉野を去のび出でさせしに行くへのまばしは知られざりけるが、程經て大安寺にいますよしの聞えければ、大臣殿よりさまざま仰せられけれども、こゝろ強く世を遁れ給ひけるとかや。

七 いぬわう丸やまだちにあふ事

隆俊卿のもとにめしつかひ給ひし犬王丸といひし童、「やまたちに行きあひて矢にあたりなむとしけれども、やうやうにげのびて」といきもつつあへずかたりけるを、殿さかせ給ひて「あつさ月ひきてまたつる山だちはいぬおふものといふにかあらぬなむ」とてをかしがらせ給ひけるとこそ。

八 實勝朝臣北のかたの事

洞院の實世の卿の御娘は、御心はへより初めて御かたちのいとめでたくおはしましたければ、帝に奉らむとかしづかせ給ひけるを、宰相中將實勝朝臣のせちによばひわたらせけれども許し給はねば力なく過し給ひしに、春の半すぎゆく頃なるべし、高間の山の櫻をよそながら見させ給はむとて、實世卿女房達を伴ひ給ひて山路をたどらせ給ひ、高ねに登らせ給ひけるを、宰相中將の君、かねて君の御乳母と御心を合はさせて茂みに隠れいますを知らせ給はで

乳母と共に眺めやらせ「げにも高間の山の名もいちじるくこそあれ。花は唯雲と見ゆるは心
あてにや」と戯ぶれ給へるを、「猶彼方よりはよくこそあらめ。茂みを出で離れなば吉野川も
見おろされぬべし」といひいひてこなたへさそふを、實勝朝臣つと出で給ひて、「岩橋渡りし
て奉りなむ。こなたへ」とかいおはせ給ひて、乳母と共に歸り給ひけるを人知らざりけり。さ
て「姫君こそ見えさせ給はね」と人々騒ぎて手を分ちて「谷へや落ちさせ給ひけるにや」と、
岩はのかくれはざまはざまを求むれどもかひなし、「かゝる奥山には天狗などいふものゝ常
に住むなれば、とり奉りやしてむ」とて谷嶺を越えてあされどもいませねば、なくなく歸り
給ひぬ。日を経て宰相中將の許に居給へると告ぐる人のありければいきまき給ひて、「帝に
うたへて罪せむ」とのたまへばなまはせむ、「かゝるみだれのうちには唯おはしませ」と制する人
々多かりければ、心にもあらでやみ給ひけり。幾程もなくて將軍義詮公の許よりかう玄給う
て、都へ還幸をすゝめ奉れば、主上は八幡へ皇居を移されしに、實勝朝臣も「都鎮まりなば御
迎に参りてむ」と契り給ひて、御供に参らむと立ち出でさせ給ふ御袖をひかへ給うて、

「何となく心にかゝる白露のおき別れゆく袖のけしきは。」「などさはおぼすにか」とて、
「わかれぢの露にはあらぬ嬉しさをやがて袂に包みこそせめ」と言ひ慰めて、心強く立
ち出で給ひけり。斯くて歳の半ほど御心を雲に宿して待ちわび給ひし甲斐もなく八幡にて
討たれさせ給へると聞かせ給ひしより、「さればよ、其の別路の何とやらむ心に懸りて覚え
しが、かゝらむ事にこそ。今はながらふべくも覚えぬなり。契りはじめし其の折からは我が

心を合せてあらねぬわざをし給へると、疎からぬ限には思ひおとされ、頼むべき人は空しければ思ひ定めにけり」とかきくどかせ給ひければ、乳母の待従「さおぼしたまへるともかひも候はじ。かゝる事もためしなきにはあらず」などいさめてまことには思ひ立ち給はじと少しをこたりけるひまに、うかれ出でさせ給へり。夕暮の程なりければさらでも道のおぼつかなきに、河音のかすかなる方をゑるべにてなつみの川のほとりにたどりつかせ給へれども、月さへうとき山陰の螢をよすがにたのみ給ひて、岩のおもてにさだかあらねど、

「山陰のくらき闇路に迷ひなむなつみの川に身を沈めなば」と書きつけ給うて御身を沈め給ひけるに、跡を尋ね求めけるものゝあまたつとひて、松どもともして見けるに、あへなき御かたちの岩のはざまにかゝり給へるを取りあげ侍りしに、わづかに御息の通はせ給ひけれども、御顔の色も變らせ給へるに、皆涙おとしてさまざまに取り扱ひ奉れば、やうやう御心のつかせけるにや、御目の少しひらければ皆よろこびて歸りけり。御心ちのつかせ給へるまゝに、御なげきをおぼめしいでさせ給ひて「せめては御さまをかへ給はむ」と頻りたまへば、せむかたなくて御心にまかせ給ふにこそ。あさましき亂れぬるの中にはかゝる事さへ數そひにけりといふ悲しくこそ。

九 行輔卿の妾歌の事

平三位行輔卿の忍びて言ひかはし給へる女の、京に住みけるが秋の半の頃いひおこせける、
「思ひかねそなたの空を眺むればわれにたぐへる初雁の聲」。御かへし、

「わが袖をなはえざればとや初雁の翅にかけし露の玉づゐ」。

十 鼻のたかき狂歌の事

内大臣實守公の節會の内辨をつとめさせ給はむとて、威儀たゞしくつくろはせ給ひて参り給ふ道にて、紀の國よりはじめて参りける武士どもの行き逢ひ侍りしに、「あな恐ろし。山伏ともみえず。まして人にてはあらじ。天狗のたぐひにてあるらむ」といひけるを聞き給ひて、「天狗ともいはいはなむいはすとして鼻ひくからぬわが身ならねは」ときはめて鼻の高くおはす事を言ひあてにけりと後までをかしがらせ給ふ。

十一 松茸の歌の事

高野山よりそねん法師の尋ねいまして、關伽棚にありける松茸を見給ひて、「いつかはとそのあかつきをまつ茸の開くる法にあはむと思ふ」とのたまはせしほどに、

「松茸のひらくる法にあふ事もその曉の雨のうるはひ」。

十二 楠が墓にらくまゆの事

楠正行が墓所に、いかなるものゝまわぎにやありけむ、書きつけゐる、「楠のあとのあるしを來てみければまことに石となりにけるかな」。

十三 康村長重狂歌の事

瀧口長重が、武藏守師直皇居を襲ひなむとまける時、いちはやく落ち行きけるを知らで、跡

にて尋ねられけれども見えざりければ、康村、

「み吉野にありと聞えし瀧口が落ちては名をもながしけるかな」と言ひけるを傳へ聞き
て安からず思ひ、いかにしてか此の返しをせむと窺ひけるに、吉野川の水上のはとりの境を
山人の争ひてうたへけるを、康村に仰せられて、境を見に行きて歸りなむとするに、年老い
にければまばらうち休みうち休みまける程に、うたへ人は早く参りて、けいだん所に待ち
居ける程に、大理の康村を尋ねさせけれども、「いまだ歸り給はず」といふ。遙かに待たせて
後に歸り來てまかじかなむと言ひけるを。

「吉野川そのみなかみせを糺す身の老いにけりとなどやすむらむ」といひし、いとをか
しかりしことぞや。

十四 右馬允行繼がとんせいの事

二條關白殿にありける右馬允行繼といひけるは、去りぬる八幡の戦にいかなるとかありけ
む、歸らせ給ひて御勘氣ありければ、幼なき子ひとり女房とを六田の里に親しき者のありけ
るに、預けて、高野山に登りて髪おろしけり。三年ばかりありて故郷に行きかへり來て、雨
まづくと泣きけるを、「いかに」と問へともいらへもせで、心のゆく限り泣きて起きなほり言
ひけるは、「諸國修行の心ざし侍りて高野を出で侍りしに、さすがに過しがたくて六田のあ
たりをよそながらも見なましと思ひて、其のはとりをさすらひ侍りしに、新しき塚のまへに
十あまりなる童の伏し沈みて泣き居けるを、あはれなるさまの見過しがたくて、いかにと

問ひ侍りければ。父は三とせばかり先に世を遁れていつちともなく出で給ひ御音信も候はぬを、母君の明暮なげき給ひしあまりに御心の亂れて、過ぎつる夕暮の程に紛れゝでさせ給ひて河淀のはとりへ身を沈め給ひしを、人々のなきがらを尋ねてこの塚にこめさせ給ひて候へども、親しかりつるも疎くて御跡を弔ふべき便りもなく候へば、一方ならぬ悲しさにかくて候ふなり、御經をも讀みて給ひてむといひし面影の見し心ちしければ餘り悲しく覺えていかに廻り來にけむと悔しきまで思ひ候ひながら、心強く經をも讀み念佛手向けて草の蔭にはいかと思ふらむとおしはかるにも涙にむせび残しおきける童の有様を見るにも堪へ難くて目ももたげられ候はざりしを見て、日もくれにければ、いざ我が宿へといざなひ候ひし程に、行くへの心もとなく侍りて行き候ひしに住むべくもあらぬ程に荒れ果て、昔侍ひし仕へ人もいかになりぬるにや、唯ひとりのみ住むなる。親しき人はおはせぬにやと問へば、貧しくなり行くまゝに問はず侍り、昔使ひし女の此のあたりに残りて朝夕のいとなみを乞てあたへぬるばかりにてこそ候へと夜もすがら語りけるは、我が身の上の事なりけり。夜も明けなむとしければ、彼の女の來りなば見忘れぬ事もやあらまじと思ひて、墓所にて經を讀みてむ、歸り來む程に立ち寄りなむと言ひて立ち別れ侍る。此の心の中をおし量り給へかし」と語るに、共に袖を濡らし侍りて「げにもかゝるはだしは候はじ。ゆくへしられず出で給ふとも玉の緒の絶え給はぬ程は忘れ給はじ。後の世を妨ぐるにぞあらむ。具し給へ。殿へ奉りてむ。心安く後の世願ひおはせよかし」といひければ、いとうれしげにて歸りけり。何とか

たばかりけむ、やがて具し來けるを、ありつる事を、けいして伴ひつれば、いと不便におぼして御（伴ひ以下五字）身近くめし使はれて右馬允行朝と名のりて、むらなき剛の者にてありける。

十五 中納言のつばね歌の事

正平みづのえ辰の年の春、舊都の主上本院新院ともにとらはれ人とならせ給ひて此の山に入らせ給へるに、黒木の御所のあさましきにところどころをしのにて厳しく圍ひなして、なほ其の外にうばらからたちをひまなく植ゑたるうちにおしこめ奉る。誠に見る目もいと悲し。櫻より外に御なぐさめもなかりけるにや、中納言の局の、

「かゝる世もよしや吉野の山櫻宿のものとてかざしにもせむ」と奏し奉らせ給ひにけると聞きて、世の中のはかなき事を花に思ひなぞらへ侍りて、

「かくばかり移ればかはるみ吉野の花見てくらす身こそつらけれ」。

十六 つくり山伏の事

梶井二品親王とらはれさせ給ひて、此の山のあさましげなる柴の庵に住させ給ひけるを、山本の三郎といひける者うけ給はりて厳しく守りにけり。二とせばかりありて「御邪氣の心ちの日に添ひて重らせ給へる」と言ひのゝしりて「嶺を通る山伏もがな。行ひさせてむ」と言ひ合へれば、守りける武士其うち散りて尋ねけるに、その明の日たとげなる山伏を三人具して参りにければ、悦ばせ給うて御枕上に召して行ひしけるに、二日ばかりありて御心のさわやぎけりと御布施など賜はる。守りける武士ども御悦のみき賜はせければ、夜ふくるまで歌ひ

などして遊びをりけり。山伏は「曉出で立ちなむ」とて御暇を申してまだ暗きに歸りけり。晝の程にや「宮のおはしまさぬ」と騒ぎて、關々へ人を走らし山伏を留めけれどもそれよりさきに通らせ給うて、其の夜興福寺までつかせ給ひけるとかや。これは御門徒の律師元祐といひける者、かねてはかりておのれ山伏となりて箒をおほきに宮の隠れさせ給へる程に物しけると後にぞ聞えし。それより皇居をいよいよ堅くまもりければ、さまざまはかりけれどもせむかたなかりしとかや。

十七 嵐山の事

彌生のころ日のうらゝかなるに女院御所の御庭に散りつもりける花のいと多かりければ、とものみやつこ召させ給ひて一とところにあつめさせ給へば高さ五尺ばかりの山のなりにありけるを、いと興せさせ給ひて、吉野の花を移せし山なればとあらし山と名づけさせ給ひて人々に歌よまし上にもけいし給ひければ、「あすの程に渡らせ給ひてむとのたまはせ給ひけるに、その夜風の烈しく吹きて、いひがひなくなりけり。つとめて辨の内侍の方へ兵衛典侍の局、

「み吉野の花をあつめし山の名も今朝はあらしの跡にこそあれ」とありけるを奏し給ひければ、

「千早ふる神代も聞かず夜の程に山を嵐の吹きちらすとは」とのたまはせていといたうをかしがらせ給ひけり。

十八 寛成御子鷹がりの事

ひろなりのみこいまだをさなうおはしましける時に若き殿上人あまた伴はせ給ひて夏みの河の河淀のはとりにて鷹使はせて御覧ありけるに傍のはとりにいと大きな岩のえもいはれず面白きに松の生ひいでたるありけり。みこ御覧せさせて、「此の岩を歸りなむ時皇居の御庭にもて參れ。上に奉らむ」と實爲中將にのたまはせければ、をさなき御心をおしはかりて、みことうけさせ給ふ。鳥などあまた取らせ給ひて歸らせ給へる時に忠行侍従に「岩を忘れ給はじ」との給はせければ、「民部大輔が力も強く侍れば御後より持て參り候ふなり」と啓して皇居に入らせ給ふ。御鷹の鳥など奉らせ給うて實爲中將に「ありつる岩を」と召させたまふに、忠行の侍従の「仰せ言をうけたまはりぬ」とけいし給へば、侍従を召して「いかに」と尋ねさせけるに、「民部大輔の御あともりもて來むといひはべる。民部を召させ給ひなむ」とのたまへば、むづからせ給うて「中將にこそよく言ひつれ。さはいふにか」としをらしめ給ひければ、中將の、ありつることを啓し給へば、をかしがらせ給ひて「誠に面白からむ岩こそ見まゝはしけれ。民部が力こそゆゑしければ、もてきなむに召させ給へ」とのたまはす如に中將立ち歸り給うて、民部大輔に「かゝる事なむある。いかゞしてむ」との給へば、「すべき事こそあなれ」とて、御庭にありけるちひさき岩に松の枝を取り付けて中將といとおもひにもちて、宮の御前にする奉れば、「これはいとちひさくこそあれ。それにはあらじ」となほむづからせ給ひければ、民部大輔の「さればこそ。その岩をもちてうへの山を通り候ひしにみぎ

左山のさし出で、道のいとせばき所にて叶ひ難く、いかにせましとたゞよひ侍りしに、向ひのかたより山ぶしの來たりけるが、岩にせかれて通られぬにこそ、のけ給へとのゝしりける程に、我もせむかたなさに斯くて侍る。いかにせましと侘びあへるに、さらばすべき事こそあれとて、すぢをおしもみ何やらむつぶやきて祈るに、~~此の~~此の岩ちひさくなりて、やすやすと通りて侍りし程に山伏も行き過ぎしを呼び返して、~~もとの~~如くに祈り直してひと云ひければ、又行く先に細き道のいますればいかゞし給はむといひし程に、げにもと思ひ侍りて其のまゝもて参りぬ」と言ひ給へば上より始めさせありつる人々をかしがらせ給ふに、宮の御けしきもいとよく参らせ給ひて、「げにさもあらむ事なれ。その山伏を召し返せかし」とのたまはすに「はや遙に行き過ぎて、いづちゆくらむもしられず」と喜し給へば「はいなき事にこそあれ。といめて民部大輔が大きな空言をすこしきやうに祈らせむものを」とわらはせ給ふこそまこと御行くする頼もしき御事にこそいとせめて覺え侍りしなり。

十九 大神宮御託宣の事

過ぎつる年の春の末つかた、天てる御神にまうで、三七日がほどは過ぎりて、かへさに中納言顯能卿の御許へ立ちよりて、一夜が程昔今の物語しけるに、「世の中のかく亂れぬること人の國には例多かりぬべけれども、和國にはこれぞ~~是~~はじめならめ。いつかは鎮まるべき。かゝる折ふしに生れきぬらむ宿世のつたなくて」など侘びあへるに「まことにさこそおはすなれ。されども御てきは亡びて終に還幸ならむとぞ~~思~~思ひ奉れ。今上の未だ陸奥の本寺に

てあづまへ赴かせ給はむとし給る（三）時、儲の君に立たせ給はむ旨を竊に申し聞かせ給へり。建武己の丑の年七月の末つ方、伊勢の國へ越えさせ給うておはん神に御暇を申しに詣でさせ給ひければ、留まらせ給ふべき御告の渡らせ給ひけれども、斯くいで立たせ給ひぬるうへはとて、許多の御舟よそひして九月の初つかた上總の地近く御舟のつき侍りしに、聊空のけしきのかはりて見ゆるまゝに浪風あしく侍りしかば、あまたの舟ども伊豆の御崎に漂ひ侍りしになほ風の強く吹きもてきて舟どものちりぢりになり、同じ所にありし舟の常陸の方まで吹かれ行きしもあるに、宮の御舟は其の日の暮ほどに伊勢の海まで吹き戻してそれより吉野に入らせ給ひしに、程なく三種の御寶を傳へ給ひて天津日嗣をうけさせ給へば何事もおはん神の御計ひにこそいますかりけれ。われも宮の御舟にさぶらひてまのあたり（四）の事に候へばたのもしく思ひて過ぐし侍る」と語り給ひしに、此のたび詣で侍りしを神のうけさせ給ふ御神託にこそと思ひ續けて、いと頼もしく歸り來にけるにこそ。

芳野拾遺物語卷第三

卷第三は後人所傳作今姑暫之耳

目録

- 一 兒島備後守こしの國よりふみの事
- 二 よし野の山もみぢ御覽の事

- 三 實世卿のもとへとむらひし事
四 御連歌の事
五 隆資卿靜仙上人問答の事
六 光明皇后の御ぐしの事
七 長谷寺參詣の事
八 伊豫の國左馬允がうた天覽の事
九 足利たい冬の事
十 藤のちかふさ卿十歳の詩の事
十一 五月雨のうたの事
十二 三位公ちかきやうはつえんの事
十三 以下目次原本無之印本文後之つくしの御子御ふみの事
十四 里見主税のすけ下人が事
十五 藏人資行はつえんの事
十六 皇居の近邊からすむらがる事
十七 先帝崩御の事
十八 つくりばけものゝ事
十九 御製の事

二十 つくしのみこ尺八を好ませ給ふ事

廿一 ひかりものゝ事

廿二 石清水へ御幸の事

廿三 楠正つら始めてよし野へ参りし時の事

廿四 詠歌の事

廿五 御歌にてつきもののく事

廿六 主上御笛の事

廿七 登俱法師の事

廿八 藤のやすもと歌の事

廿九 高野山御幸の事

一 兒島備後守こしの國より文の事

いにしきさらぎのころ兒島備後守高のりのもとよりの使とて尋ね來れり。ふみいとこまやかにおもひをのべてたゞましくかき給ひてけり。その中に「さても世はおもふに適はぬさかな。いづれの人々も君に忠をつくし、御敵をはろばしふたゝび一統の御せいとうをあふがむとのまことをのみおもはぬはなし。高德いやしくも先帝の御ためにはもろこしの紀信が義にもなぞらへ、子房がはかりごとにもおとら^あまじなどつとめて心ばかりはいさぎよくあけ暮これのみ計るといへども御連のつたなきにや、其の事ゆかで、やゝもすればみかたによ

からぬけいなどいましていと口をしく候ふ。こしの土ともなりなまし。さても年頃のよしみ
わするゝまもなく侍れども軍のために明くれば西東にいそぎ、くるれば北みんなみにはし
り、いとまには高きいやしき一所にあつまりせくゝまるはかりごとより外には他事もなし。
さればとてむかし契りし交りをわするゝにはあらねど、自ら道の程も敵のためにさしふさ
がれぬれば心してとぶらふべくもあらず。ひとへに生をへだてたるばかりなけき侍る。その
たよりとてもまれまれなればうへにことなる御事もましまさぬにや、人々はまめやかにつ
かうまつり給ふにやといと心ならずいぶかしくてなむ侍りて。いつしかうつり行く年月に
て何事もおとろへたる世のさまなるに、御運もそれになぞらふべきにやと一かたならぬさ
まのみよろしくはかり給ふべし。入苦のきやうがいはいはたかきいやしきへだてはべらねど
外のいたはりかぞへつくしがたうおぼえはべる」などむかしいまのことこゝろばせをつく
してふでをそめたまへるさままたなくすまようのことにもおもひはべる。此のふみのほかに
またまたゝめたるふみやうのものあり。ふうをほどき見れば、あらたまのとしを祝したる
詩なり。

「近翫胡人而吟北陸。遙離嘉南風音信區通矣。嗟乎芝蘭今既凋心友斷交。闐然送光
陰而已。殊舊冬之玄塞新陽之餘寒。交以徹于肌骨。宜預憐察焉。委曲別以狀。鄙懷千
萬端。」

東風吹暖入家々

想像九衢塵裏嘆

不識世間春色遍

舊炉殘火去年花。

比來雖願劇住莫誼修禪之工夫矣。俗士之隱生者乎。

二月甲戌

兒島高德

隱老

机前

いとこまやかなる事なめりかしと思ひて、ついでもろしくえいらんにそなへ奉りしに「いとやさしさ」など勅賞ありしことあり難し。

二 よし野の山紅葉御覽の事

秋の暮人々さそひ奉りて、野山の色をめでくらし、よし野のわたりさまよひ侍りしに、さくらもみぢのにしきと一しはのながめそひてかへるさの道もわすれ侍りて木かげにおのおのなみゐてけり。月のまへの初時雨も物あはれに折ふしそひてをかしきものなり。昔よりあらたまの春といへば、よし野の山の櫻をこそいちはやく歌にもよみ來しに、秋のもみぢさくらが枝花にはなほまさりてをかしくも侍る。人々もふるき歌あと口ずさびてへだてなくたのしぶにぞ、まばしは世のみだれもわするゝ物ならむかし。うへにも此の事きこしめしつゝ、ひそかに御幸ならせ愛せさせ給ふ。御供には忠資卿局あどさぶらへり。山里のさびしさのまゝ、落葉にうつる夕日のかげさらなるを御覽じさせ給ひて、

「山里のかきねの道のさえくれて木の葉の外はとふ人もなし。

入相のかねのよそなる木末にも心づからとちるもみぢかな」と詠めさせ給ひ、それより還幸ならせ給ふ。

三 實世卿のもとへとむらひし事

「望月のかげさやかなるをたいにやはなかもむべき」と實世卿のもとへとぶらひ奉りしに、たかすけの卿もおはして二人三人へだてなくてかたらはせたまひしに、「名にしおふ今宵の月にむかひていまやうの歌などもいとなつかしからず。むかしの人のたくみなるよそほひを口すさみて我がものがほにせまし」などたはぶれてありしに、實世卿の青侍やうのものども五人六人もありしが、さうじを隔てゝまこうしてけり。月も庭のおもをてらし更けゆくまゝに興そひ侍りしに、雁がね幾つらもわたり其の聲空をひいかし聞えしを、月の夜に初雁の聲はふるき人のもとにもてあそびきたるめり。心あるきはのもてあそび是にまゝはあらじと、いみじき歌など十首ばかりもよみはてゝ「さかなこそなけれ。酒たうべてむ」などありし折から侍従の青侍の聲して「今宵の月はさらなれど初雁にまゝはなし。願はくは此の雁を得たき事かな。思ふやうにまさなごとしてたうべてむ」など口々にのゝしる。それをへだてゝくりやのちかき所に下部おほく世のさたしたはぶれ侍りけるが、このかりの聲とさゝて「あはれよきものゝわたりはべる。いくつらかあるらむ。とらへねぢふせころして市人にあたへてかはりにこがねやうのものを得たらましかば思ふやうによろづのねがひをかなへてむ」といひけるにぞ、みゝにたちておぼえはべりし。人々のねがふ所まことに品あることにぞ。哥け

いしてむなど仰せられしは本意なるべし。あつものにしてたうべてむといふもいとさがしくは侍れどあながちににくからず。ころしてこがねにかへてむなどこそつれなく狩人めきたり。人はかゝる折からにこそ其のまじなもあらはれぬべき事なり元知。

四 御連歌の事

神無月の比當今の人々めさせたまひて、御ゆふの御ついでに「我が朝の歌は古今集後撰のころの風骨ふかくえならぬ歌仙もありけらし。その後ひみじき歌あまた撰集に見えたり。はまのまさこはいふめれど、いさやうの歌はみなおなじやうなることのみにとめづらしからず。應長の比より連歌をもてはやして、いかめしき句などあまたつくるものあり。朕よりこれをもてあそび、此のほどは歌をよそにして連歌をのみふかくたのしめり。こよひ人々も發句なとつかうまつりてむや」と仰せられてあそびさせ給ふ御句に、

「月やあるありわけの夜の夕時雨」。又いといとかなしき御心を、

「世々ふるもさらに時雨のやとりかな」。御二句あそばしめ給うて人々もつかうまつらしめ給ふ。

「散れば着ぬ袖もあらしの紅葉かな」隆資、

「花をさへ忘れぬかせの木の葉かな」實世、

「色ときはあらしにちかき落葉かな」親房、

「落葉せし本末につもるあらしかな」女房。此のほかにあまためづらしき句ども有りつれ

ともおぼつかなくてかきもらしつ。

五 隆資卿靜仙上人問答の事

西大寺靜仙上人とぶらひて隆資卿のがりおはし侍り。世のおとろへ行くさま武士のいさはひまうなるふるまひ佛法の沙汰とりどりつたなからずかたり給ひ侍るに、あるじのとひたやうけるは「むかし其の寺に靜安といへる比丘宿りて常騰法師とかやいふなるに一宗の至要をうけ學びて、其の後は江州比良の山に寺を結び住み侍るといふ。この靜安法師御佛名經をよみて禮拜修懺せられける。其の聲比良の山より帝闕まで聞えて侍れば、うへにもためしなくたふとく思しめして僧官をおくらせ給ふ。また諸國のあひだへも聞ゆなどいひつたへ侍り。昔元良親王元三の奏賀の聲大極殿より鳥羽の作り道まで聞ゆると李部王記にかき給へり。これらにかざらず田原又太郎たゞつなが聲も十よ里を隔て、遠くきこゆるといふ。是はそもいかなる事ぞや。いぶかしき事どもなり」となだらかにかたり給ひければ、上人「それこそ御ふしん至極に覺え侍り。佛家の事は其のさとりを得て、我が心をほしいまゝにすることあり。されどいきやうにはふしぎの人もなし。唯くちのみいみじくて心くもれりとみえ侍れ。さもあらばあれ元良親王又太郎が事はいかなる音聲ぞや。かやうの事異國にも例おはし侍り。佛法のみにかざるべからず。いかさまふしぎの事にはさまざまのりやうけんをくはふれども、いづれも決しがたきものにておはしませば、愚僧ははかり及ぶべき事に侍らず」とやすらかにことわりてかへられ侍るとなむ。此の上人いみじき人にておほくの書籍をあ

さらめられたりとぞ。内外の文を引きて返答あらばいかばかりもうつはもの廣くさこゆべけれど、さはなくしてありつるまゝにこたへられしはまことに智者なりとぞ。

六 光明皇后御ぐしの事

南都諸大寺を巡禮して、御寶ものどもあなたこなたと拜み侍りし時心にまみてたふとく日數のうつるもえらずさまよひけり。中にも有難くおそろしくおばえしは興福寺寶藏の内にまろき筥あり。其の中に丈一丈あまりなる髪あり。其の色ひすゐを欺く黒かみつやゝかにしてなぞらふべきものなし。是は光明皇后の御ぐしなりとぞ。さらに今やうの髪に似ず。かゝるものもありけるにやと覺え侍り。七百年の昔の御すがたをとみるやうの心ちになむ侍る。御かたちのうるはしきは昔よりの文どもにかひがひしくあるしとめつれば、今さらのぶべき事にもあらず。觀音さつたのさいたんなりといふ事かの縁起にもくはし。やんごとなき御事なるべし。

七 長谷寺參詣の事

同じ時初瀬にまうで侍るに、其の地景よそにかはりていとめづらし。山川のいさぎよき流岩間をうがち、嵐くもをしづめて夕日の影あらたなり。坊舎谷をかけてつくりならぶ。をちこちのかねの聲にひみやうのねぶりをさまし、こすゑの花かをりきてはうきよのけがらはしきをさく。まことに玉かつらの君のいにしへもおもひ出でられてあはれにをかしく侍る。そもそも當寺御本尊は吾が朝の貴賤を救はせ給ふのみにあらず、もろこしまでも御利やくふ

かきためしもありけむかし。昔後嵯峨院の御位にましましける御時、世尊寺の行能朝臣年すでに七十餘に及びて、ひとりの子なし。是すでに我が家の絶ゆべきにやと、あはれ佛にいのりてなど思ひこめて、寛元元年に此の佛に詣で、子を祈りけるにいとあらたなり、ひとりの子を生めり。白川の三品經朝卿といふ是なり。此の經朝康元の比かや生年十三歳にして大内の番帳をかきて勅覽に入れ手蹟うつくしうたへなりしとぞ。年六十に餘りてめいどの請におもひいて、えん王宮に至られけるにえんま王此の人に命じて額をかゝせ給ふとなり。いかなるぞや、七日がほどいさもたえておはしけるに其の程すぎて蘇生ありて、もとの如く家のわざをもつとめられける。人々とぶらひて悦び且はあやしみ給うておはしけるが、其の後いくほどなくして、身をばり給ふ。けうの事なり。又參議佐理卿はいよの三しまの神託にて日本總鎮守三島大明神といふ額をかき給うて神の御心にもかなひ後の世までもほまれをのこし給ひけり。是皆まことの心より佛神の御めぐみもあり其の道に妙をも得給ふよりなるべし。いまやうはむげにふつかなるさまのいと心にくからず。

八 伊與の國左馬介が歌天覽の事

伊よの國さまの介のもとより日比よみ侍る歌なりとてのぼせられけり。五十首ばかりもかき集めて傳奏の御たちへ送られて褒貶を請はれけるを「たいにやは判すべき」とて天覽にそなへ奉らしめ給ふ。君も御さそくとにうるはしく「かゝるみだれのものなかなれど心ばへやさしくもつかうまつりし」など仰せく察されて、やがて勅判をくだしたまふ。いとあり難き事

にぞ。かの巻物のうちに、多くの御褒美もそへしめ給ひけれど、皆記しとゞめず。「川千鳥

山河の岩間の氷さゆる夜を思ひかねてや千鳥なくらむ。名所松

●陰たかきみのゝを山の年を経てちりうせぬ松の世々の言の葉。祈禱

年をへて思ふ心のかくとだに祈るを神もあはれとや見む。月照、塞草

影さむきかれ野の草の霜の上に月すみ渡る冬の夜の空。寄道祝

治まるもことわりなれや君が世の恵つさせぬ敷島の道」。これらの言葉をわきていみじくおほせくだされし。いとありがたくこそ。

九 足利たいふゆの事

あしかひ左兵衛佐たいふゆは尊氏の息にて侍りしかと左馬頭直義不便せられて父のもとよりもとりなされ侍るとなり。此の故に熊父の字をとりて直冬とはいひけらし。これ御敵の張本なれど其の心ばへのやさしさ事をさこしめしけり。一年鎮西の軍やぶれて直冬はふはふになりてわづかの人をあひやし引きえりぞかれける。折ふし、

「あづさ弓我こそあらめ引きつれて人にさへうき目をぞ見せつる」となむ侍りし。軍くづれていそがはしきに優なることになむ思しめしける。此のうたふかき事にも侍らじなれど、人にさへうきとつゝけたる所又あさからず。すべて此の道の心ばへある人々は後まで名も残りぬるものならし。たとへ及はずとて外の藝のいたれるよりはまさるものにも侍りなむかし。貫之がいひしことの葉げにとぞ思ひ侍る。

十 藤親房卿十歳の詩の事

藤の親房卿わかうより文かずあまたあきらめうへの御ためにはこゆるはさのちよう臣にて
ぞおはしけるが、源中納言のはて給ひて後はよろづ心細く思ひ給うて、御前のつとめもをこ
たり給ひてはうさのいたはり日にそひて筋骨をくるしめければ、うへにもいたくいたはら
せ給うてめさいりける。此もあき家の卿のなくなり給ふかなしみのつもりにやとぞみえし。
ある時とぶらひ奉りちかくよりてへだてなく申しなぐさみ侍りし其のついでに申されしは
「われかたくなにしてをこたり侍れど故院あながちに不便せさせたまひ、人々にもうとまれ
ず、人とありてあまたの文をよめども心おろかにてあぢはひがたし。此のゆゑにさてくやみ
となれり。十歳の春人々御前にめさせ給ひて、あらたまの春を祝する詩歌つかうまつりてむ
と勅を承り此の詩を叡聞に奉る。

春來品物都青容

木母花開香正濃

今日太平三洞旦

家々酔賞更飛鍾。

此の句を御覽じて上古の名士にもおとるまじと勅賞まことにありがたうおもひくらし侍り
しかと思へば夢のやうになむ侍る」とのたまひければいとよそのいみじさに感涙を袖に
うつし侍る。さてはまれあるひとはをさなきよりやごとなきものなりとぞ。

● 十一 五月雨のうたの事

五月雨のはれまなくものさびしまゝに友とすべき人もおはせでひとりごちて侍り。これ

より人のがりとぶらひ奉りてなぐさみてむなど思へど、さすが世をそむきかすかなるすまひに住して雨のさびしさをいとふもほいならずとおもひかへして、つくゑの文などくりひるげ歌をあんどして侍るに、

むかしおもふ草の庵の夜の雨になみだなそへそ山ほとゝぎすと人のうたをふとおもひ出して時うつるもしらで、あはれのなみだおさへがたし。日くるゝまゝなればねんじゆしけり。いまやうのふつゝかなる言の葉をよみ侍らむもいとほしがはしくてやみにけり。いにしへの歌仙はかゝるたへなる言の葉のみいかでかくはつゞけられしなどあやしくおもひはべるもいとをかし。

十二 三位公ちか卿發心の事

冬のなごりもいと烈しく風あらゝかなるに野山のながめも物すごくあらである古寺へたち入り侍るにあるじの僧「これはめなれぬ御事なり。此のわたりにすませ給ふとはみ侍らず。よくも渡らせ給ひぬるものかな」とて明り障子のあたらしきをさしまはし火などたきて「餘寒は冬よりもたへがたく侍れば、こなたへよらせ給へ」などとやさしげにもてなして心のおよぶばかりにしりまはれるさまいとるななめかざるふるまひなり。床のあたりを見れば連歌の反古などひきちらして人丸の繪をかけたなり。あやしきことかなとおもひて障子をすこしわけ侍るに、庭にさきたる梅の花の風にまたひてかをりくるに、いとえならぬおぼえして、「はなはまつ風のたをりしにはひかな」と發句をつゞり侍りしに、あるじの僧いとよろこ

ばしげにて、「あないかめしの御ふるまひやな」といひてその身も句をつけ侍られしをいとふしぎにおもひて、「御僧はいづれの國よりわたらせ給ふ。またこのちかきわたりの人なるにや」といひ侍れば「まかじかもの侍る」といにしへ今のありさまをいとこまやかにかたりたまひしにもうたがひもほどけて侍り。やんごとなき三位公親とかやいひし御事が世上のさわがしきをうとみてもといりをはらひ、身をやすくはからひたまうてちかきほどより此の寺にすみ給ふにぞありけり元如。

十三 つくしの御子御ふみの事

うへのめさせ給ひしとて人々まわり御まへにさぶらはせ給ひけるが、「つくしのみこよりの御文なり」とてあまたひらかせ給ひて人々に見せさせ給ふ。此のみこも久しく戒衣をめさせ給へばやさしき御ことの葉もをこたらせおはしますすらめと人々も思ひ奉られしが、近きほどの御文の中によませ給ひける御歌あり。「夕落葉

おとまがふかひもあるかな夕時雨染めし言葉の苔のみどりは。寄鳥戀

いかにせむ思ふいもせはうちつれてあまとお鳥もわりけるものを」。これらのやさしき御ふるまひをみ給ひて人々も感涙を流し給ふ。

十四 里見主税のすけ下人が事

里見主税のすけがもとにいみじき若黨あり。心ばせおとなしく、むらなく主人のために骨をくだきて侍るまゝ、里見も不便してめし使ひける。其の頃内侍の女わらははこの男をみそめて、

あなたよりまたしみより文やうのものまた、め人してひそかにかのもとへ遣はしける。心ときめきて、さそふ水あらばとよめる昔の歌もあり。まして女のあこがれておこせしむねをいかでそむき侍らむ。これさいはひの事よと返事また、め送りければ、女もいとうれしくて「かしこうぞよそへもらしたまふな」とまたしきをたのみて、宵の月くらき程にないしのうちをまのび、そのもとへまかでつゝ、あさからずとし頃の思ひたまひつる事どもをいひはたし、ふけ行く夜はの鳥がねも耳に入らでたがひに語りつるまゝに、夜もやうやう東の山よりわけがたちかくなり侍れば、「いざ歸りなむ。又もいとまをうかいひてこそ」とて歸り侍りしが、其の後はかの女心ばへそゝろになりて、内侍へのつとめも身にそまで思ひ暮しつるまゝに、人々にもさとられ、さがなくそしりをまうけ内侍にもきこしめして「時こそあらめ、この頃はものゝふのいそがはしきに、うへにも御心うくわたらせ給ふ折からに、いとにくきことや、女の方より戀ひわびたる事はためしもあるべきなれど、めしつかふによしなし」とて追ひはなち給ふ。女わらはもすべきやうなくて、男のかたへゆきてかくといひつゝ、「ひと目ふつかこそかくしもまてむ。さわがしきをりからかゝるふるまひを主人に聞知侍らば行く末とてもあしかるべし。又頼みよるべきかたも侍らず。時うつらば人もあざけりなむ。此の世こそつたなからめ、後の世は久しう」などいひてよひのうちに忍び出でけるにや、木ぶかき山かげに入り二人もろともに刃にふして果てけり。いと悲しき有様とて人こぞりてあはれがりし。内侍にも聞き給ひて始めいさめつるはいとくやしうて不便に思ひ給ふれど、とりかく

すべきわざも君にはいからせ給うてやみければ、そのほとりのものがあつまりて、二人のなきからをかくし念佛してとぶらひける。こゝに「あさましや。かくならむさまはかねてあらるべきに、あたら命をはやうして、ながき世のあざけりとなりぬ」といふ人侍り。それはつたなき心ばへなるべし。かりそめのちぎりといへども偽らぬまことの心からは身をすて侍ることはやまとよろこしのためしををさをさつたへ侍り。たれかはいのちもをしかるべき。後のわらひをもはいからじ。

十五 藏人資行はつまんの事

先朝へつかうまつりし時、くらうと資行も同じう参りける。此の人いみじきはまれありて、うへにもことにおほし給ひけるがいかなる心にかありけむ、御いとまを申し遠つ國へまかりけり。世のさわがしきまゝになつかしく思ひ侍りつれど、敵のために道をへだてられて、文してとふべきたよりもなく、身のおき所さへさだめざれば、いたづらに多くの年月をふるまゝに、ゆかしくとて此の秋きにけり。こしかたの物語つきせず、かやがのきばの月をながめて、「あらぬは人のゆく末のそら」とふるま言の葉を口ずさみ、七世のうまこに逢ひたる昔もかくやと嬉しくて草の庵にとめ侍り。世をすてたるあばらやに露霜のもりくるもいとあさましけれど、心ばかりのもてなしにて世をいとひしどちかたり侍るに、いと興もつきざりけり。彼の人申されしは「あけなばわかれて高野山へまからむ」と「今いくかとまり給へ。古き都なにかしのかたより文してとぶらひ給ふれども、程すぎ侍ればいとにくしと思ひた

まふらめ。此のたびまからぬむいさ」とけいしければ「みづからもいとまある身なればその御かたのまらせ給ふにはやかるべきにもあらず」とてともに麻を出づ。いとくべき道しならねばこゝかしこに時をうつし、舊跡をもみめぐり侍るに日數もつもりてやうやうゆきつるぬ。あるじさまだまのもてなしいとまばゆきまでと思ひつれば「よき程にはからはせ給へ。世すて人はまめやかにかたりてこそほいなれ」と申し侍れどたまさかのとぶらひなど仰せられて猶やみたまはざりけり。「つれの人も大かた此の程の道につかれゆるしたまへ」などことわりて、あるじもともにへだてなくふしながらかたり侍る。ひとひふつかとままりて西東の山々をいさゝかながめ侍るに、昔にかはらぬさまいと面白くて日くるまゝにかへりける。此の夜しも、月わかく異そひて物がたりもいとつきなく侍る、故郷殘月といへるころみづからまみ侍る、

「花の色とふりにしさと月影もうつりにけりな明ぼの空」。あるじも興ありて詩をつくもつれぬ、たちし人もとりどりのうたなど有りつれどわすれにけり。

十六 皇居の近邊からすむらがる事

同じ御時おほくのからすむらがり皇居のうへにて東西へわかれとびまはり鳴くこゑいとかなし。守護の武士どもはらへともおそるゝいろもなくよのつねならぬことなりとぞあやしみけり。

十七 先帝崩御の事

「過ぎし比夢みしこそあやしけれ。所は藏王堂のうしとらとおぼしきに、主上みゆきならせ給ひ、御心よく四方の空を眺めさせ給ひて御りよう眼のうちおそろしく拜み奉りしに、うへの山よりひとつの大龍來り頭をかたぶけわたるに、主上此の龍にめしてこくうをはるかにあがらせ給ふ。供奉の人々もついでにのぼり給ふべきやうもなくてあふのき居たると思ひしに、夢さめたり」とさゝやましきが、程なく崩御ならせ給ひ、御さうそうの夜はいづくともなくがくのこゑひきて、供奉の人々耳をおどろかし侍りてありがたく袖をまぼらぬはなし。およそうへの御事申すもおろかなり。三十三天の日輪を御親とま給ひ生れさせ給ふ萬葉の實位にそなはらせおはしませす御身なれば、御命をはらせ給へるにつけてさまざまのけいのありしることわりかな。御後世の事かねての御つとめをこたらせ給はず、御りんじゆに妙なる樂の空にまこえしこそ佛の來迎とおぼゆ_和。

十八 つくりばけものゝ事

先帝はうぎよならせ給ひてのちけさうの物ありて、それにあひみる人魂をとられ、絶え入り侍るといひしこそ、かゝるあやしき事はむかしよりいひふりたるばかりにてまことに思はざりしに「これはまのあたりみたるなむ」と語る人もあればあながちにうたがふべくもあらず。此のばけものに逢ひしものは絶え入るのみにあらず、其の人の身にきたる衣持ちたる物までことごとくうせたといふこそぬす人なめり_和。けさうの衣裳をはぎとりたるためしをきかず。人々は「たゞ門戸をよくさしかためたまへ」といひわらひけり。人生の居りがたきは

安穩といへる語あり。まことにいみじき金のことばともおぼえ侍る。世の中のまな一人より下民生にいたるまでそのつとむる事やすからず。また法師ばかりいとまあるものはなし。先師も常にいひめれど、それは世俗のうへより見ればなるべし。いとやすからぬものなり。人をおどして其のものをうばはむとするものは、我が身をささとすればなほあやふし。かゝるふるまひをたくみておそろしきかたちをして人に見えむとつくろひしまいとたやすからず。

十九 御製の事

山中の皇居なればとひ奉りし人とてもなく、たゞ法師やうのものゝ外よそよりまゐる人もまれまれなり。建禮門院のむかしも思しめしあはせたまひて「いとさびし」とのみおほせあかさせ給ふ。山家雲といふ題にて、

「峯にたつ雲もやたよりつれづれとすぎの庵の夕あけはの」とながめさせ給ふとかたられし。羽林もうた奉りしとみせられしがあすれにけり。

二十 つくしの御子尺八を好せ給ふ事

つくしの宮の御としもゆかせ給はざる御時尺八をめしてんせい妙をえさせ給ふ。よしの川のみゆきに吹かせ給ふにぞみなれぬうろくづ數えれず水よりをどりあがり、うへにもめづらかに興せさせ給へば、たゞひなき御事とぞ。昔も妙音院殿熱田のみやしるにてびはをひかせたまふにうろくづくがへをどりあがり侍ると申し傳へし。「まさしく宮此の御類ひなり」

とてかんじ奉りけり。尺八は本は質穴と樂書にかき侍る。いにしへ聖德太子生駒山にて尺八を吹かせ給ふに百獸はしり出で、かうべをかたぶけ聞きけるとかや。

廿一 ひかりもの事

先帝崩御ならせ給ひしまへの月よりさまざまのあやしきことのみはべりしにひとびとむねのほど、とさめきたまひしはよひのほどより東のやまよりくろくもひとむらたちいで、雲はよのつねならずわざとつくれるやうにいみじくて色々のかたちになんじ侍る。これこそ希代とみるところに、まばらくありて雲のうちよりひがさのひろがりたるほどのひかりもの出で、すぢかひに西へとびゆき雲のうちへ入りけり。其のとほりしあとはにじのごとくなるすぢ五つならびてその色あをわかし。あやしき事たゞひなし。四方のやまかゝやきくさ木もおしなべてひるよりもあかし。まばらくありていかづちのやうになりて半時ばかりもやまざりけり。むかしのことはしらず、まぢかくかやうのけいめなれず。おそろしなどおろかなり。

廿二 石清水へ御ゆきの事

世の中のさわがしきなかによからぬ事のみおほく侍りしゆゑに主上ひそかに石清水へみゆきならせ給ひ、御手づから願文をえたゝめさせ給ひて御心のそこをはらはせ給ひ、御祈りせさせ給ふ。紀氏のなにがしをめて當山の先達とし、かなたこなたの神祕をきこしめさせ給ひける。法印奏せられしは「當社の御さどく、昔よりつたへ侍るにまざりて愚口にのべがた

き事なれどさまざまの御奇瑞品をつくしける中にも、南門破風のうへに又ちひさき屋根の如くにみえさせ給ふは仲哀天皇を勸諭し奉る御社にこそおはします。八幡宮三所は中に應神天皇、左は神皇皇后宮、右は姫大明神にてわたらせ給ふに、仲哀天皇をみやしろのうへにわがめ奉らせ給ふは神職もわきまへがたき御事なり」と奏し奉れば、主上破風のかたをはるかに覧覽せしめて、御信仰の御きそくにて此の御神にも御願文をこめさせ給ひて御祈請なのみならず、みづからも拜し奉り、たふとくも老涙袖にあまりてぞありけり。騒亂の中を御忍の御ゆきなれば、他事の御さは更なくてはや遺幸ならせ給ふ。

廿三 楠正つら始めてよし野へ参りし時の事

くすの本正行はじめて皇居へまゐりける時、主上いとたのもしく不便におはしめし、正成目本第一の忠義をあらはし其の子正行もおなじ志なる事、有りがたくも勲賞ありし。人々もためしなき御事に奏したまひけり。参内の儀式いとゆゝしくおとなしく人々涙をながし給ふ。正つらはちゝが武略にもおとらず、歌の道にも志ありて、故郷にてよみし歌の中に、おほやけのつかへ人にもはぶさるほどの言の葉おほし。かたがたいかめしき人なりとぞ。此の折ふし折りつけたる一通の文やうのものを取り出して隆賢卿へ奉りし。これこそ父正成が最期にふるさとへくだしたるものにてぞ有る。やがてうへにも奏したまひてけり。

「今度筆者指遣候事非余之義候。我等最期近々ニ覺候。願は貴殿成長之器量見届ケ度候へども、義之重き處更難通勤事無懈忠孝之勤成長之後我等心中可被察候。

外に此巻衣三從、君拜受具足は祖父が着古候へども永形見と送候。

建武二年五月日

兵衛 正成 関

楠庄五郎殿

此の文をうつしとめて人々に送り侍りし、ふかくいつくしみ給ふ。

廿四 詠哥の事

綾小路敦郷卿文してとぶらはせ給へり。いとうれしくて見侍るによろづ言葉をかきつくして、「出家雲、山家雨といふ必ばへをよみてむ」などたはぶれ給へり。もとよりかたくななれば今更讀みぬべくもあらず。されどあながちいなび侍るも無下におぼえて、「出家雲、山家雨よそはみて住まれむ物か山里の雲さへかへる夕暮のそら。

つれづれも絶えて住みぬる山里の軒ばもくつる雨の音かな」。源のやすむら此のうたをみて、「高運のよるまひなめり」とたはぶれしはまことにかたはらいたかりき。

廿五 御歌にてつきもののく事

辨の内侍のもとにやんごとなき女ばう有り。いまだ君へも参り給はず。かすかなるさまでおはせしが、心ばへこと女にすぐれ、かたちもよざまなる事君にもきこしめし、いつしかこひしのばせ給ひしが、世のさわぎにまぎれさせ、ひと日ふつかのびゆかせ給ふに、女ものくるはしくなりて、けしきいとおそろしく見えけり。神子をしていかなるたゝりにやとてうらははせられしに、きつねのわざなるよし申してけり。とかくはらひのけつれと日にそひて猶

ものにくるひし、夜に入れば唯冬木冬木といふより外はなし。頃は霜月わた小袖がさねきても猶さむかりしに、此の女はひとへの衣ひとつきてあせをながしける。いとけうの事かな。いかにせむと月日のうつり行くほどに、隆資卿此の事を奏し給へば、君もおどろかせ給うて御製、

「春にこそとふ人もあれ花の君ふゆ木といふはおのがいつはり」とあそばして物ぐるひの門の柱におさせ給ふるに、たちまちつきものはのきてぞありけり。實にいとまかしこき御事いふばかりなし。

廿六 主上御笛の事

主上御笛を好ませ給ふに、天性の御器用いとかしこくて妙音をそなはらせ給へり。御たしなみふかくわたらせ給へば、時として御ころよからぬをりも侍り。臣ついでよろしくいさめ奉りて、「もし御いたはりなどもふけさせ給はゞ民のくるしび」と歎き奏しけるに、「それはさるいさめなれども、いたはりは此のわざにかぎらず。時ありてなやめり。堀川の院こそふえの御たしなみふかく、寒月の影によもすがらふかせ給ひ、かはらけを藏人にもたせられ笛の下口にあてさせ心みさせ給ふに、御いきのまづくかはらけにまたり、一夜にみたびたまりけると傳へたり。いみじき事いふばかりなし。」「朕がもてあそぶは物かすならず」と勅にこそ言葉なくかふるゐおさへかねまうぞさし。」「あなたふとの偷言かな」と申し奉りし。

廿七 登俱法師の事

登俱法師は左馬介氏○種が猶子なり。來りて佛のさたなどかひがひしくかたり侍りてのちに樂などの物語もはじめてけり。わかき時よりびはをまうし侍れどいと不堪のうつはものにてことゆかざりけり。されどもけたいなくつとめ侍れば身一つのたのしみになるばかりはおばえ侍るとなむ。胡國には胡沙などいひて草木も生せぬいさごの地おほく侍る。其の處のもの月の夜になり侍れば友をさそひつれ、かのところに至りて馬にのりながらもびはをだんじける。其のころ大風の吹くが如くしてそこばくの遠き所まで聞え侍るといへり。いとをかし。人と生れたらむには先此のわざに心をかけてむと文にも侍る。鴨の長明が道人といはれしは絲竹あきしまの道をふかく心がけて人の心もやはらげ侍りしより世にたふとく申し侍るとなむ。やさしきことなり。

廿八 藤のやすもと哥の事

藤原のやすもと山家水といふ題にて、

「うらやましおなじ山路もかげに住む岩がき水の清き心は。此のうたを庵のさうじにおして給はれ」など語られたり。いとやさしきことになむ。其のごとくして置きたりしに人ごとく「是は誰人の歌やらむ」疑いみじき事に申されけり。

廿九 高野山御ゆきの事

先帝の御時よしのゝみかりやをしのび出でさせ給ひて、高野山へみゆきならせ給ふ。其の比も世のさわぎのなかなれば供奉の人々とてもとほしく、いまいましき御さまにてけはしき

山路をまのがせ給ふ。御りようがんうるはしくをがまれさせ給ふにぞわりがたくて涙をながさぬはなし。をちこちの長道なれど、みこしもやうやう高山にあげのぼらせ給ひ、金剛三昧院に入れさせ給ふ。法印おどろきあふぎ奉り御忍びの臨幸なれば、御ゆきのぎしさもことかはらせ内院よりはるかに廟所を觀覽ましめて御みことのおちえんのそとまでほのかに聞えさせ給へば、ありがたし。其の後法印當山の靈物なりとて一の巻物を天覽にそなへられし、高祖大師の弘仁の帝へさしげられし高野一山の畫圖をつくらせ給へる物に、天皇御震輪をそめさせ御寄附の文をかきそへられ、朱の御手形おさせたまふにぞ有りける。君にも御觀覽の後御寄進の御言の葉をそめさせ給ひて、一軸三跡の巻となされていといみじく、高野の一物なれかし。南國の武士は御味方に參れど、君の臨幸をあらざれば關々をふさぎて往還のかよひなし。當山もさうざうしくて君にも還幸におもむかせ給ふ。其の外の事忘れ侍れば記さず。

芳野拾遺物語

終

明治三十九年一月卅日初版發行
明治四十二年十月八日再版印刷
明治四十二年十月十二日再版發行

國文大觀物語部四奥付

全十冊定價貳拾圓

不許
復製

發行所

監修者

同同同同

編纂者

發行者

印
刷
者

印刷所

大本

落井小木本
合上杉村居

合上杉村居
直賴楳正豊

直賴楨正豐

文國邨辭類

松丸
下
岡

岡大
三

郎 桂

出野信

慶

市芝區新錢座町十番地
中村彌

助

近藤商店印

所

東京市赤坂區丹後町六十四番地

明

文

社

